



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



この困難な時に

主任司祭 小西 広志 神父

ニュースを見ていて、今年になって新型コロナウイルス感染症まん延防止のための緊急事態宣言とまん延防止等重点措置が発令されていない日は数日しかなかったという事実を知って、とても驚きました。修道院の中で生活していると世の中のことがよく分からなくなるようです。実はとても厳しく、困難な時を過ごしているのだと知らされました。しかし、それでも人は生きていかなければならないですから、満員の電車に乗って通勤も通学もしなければならぬし、人でごった返すスーパーにも買い物に行かなければなりません。これほど生きていくことに真剣に取り組まなければならない時が今まであったでしょうか。

不安と不満がよぎります。どちらも「何か」に対するものです。ですから、いつも心が外の方へと向かってしまいます。マスクをしないで歩いている人を見ると不安になります。なぜマスクをしないの？と不満が生まれます。不安と不満は怒りを生み出していきます。今、やり場のない怒りの中で生きている。それが、わたしたちの現実ではないでしょうか。怒りは、為政者へと向かいます。自治体の首長へ、政府へ、総理大臣へ。しかし、どんなに怒りを向けても、彼らは痛くも痒くもありません。なぜなら、人々の怒りは彼らには関係ないからです。

ですから、社会の中にあきらめが生まれます。わたしたちの現実の第二の姿はあきらめです。あきらめは、無感覚、無関心と呼び起こします。台風などの水害の被害にあわれた方々をブラウン管越しに観ても、かわいそうねの気持ちは少し生じますが、それでおしまいです。道ばたで困っている人がいても、見ないようにします。もう、誰にも関わりたくないのです。もし誰かに関わってしまったら、我慢していた怒りが爆発し、不安と不満に負けそうになるからです。歯を食いしばって生きていることを、ちょっとでも緩めたら、新型コロナウイルスに負けそうになるからです。

こんな心と体の状態で生きていくのはとてもしんどいです。そして、いつまでもこの状態で生きるのは無理です。どこかで心がポッキリ折れてしまうかもしれません。どうしたらよいのでしょうか？

七月に、少しだけ存じ上げている方が自然災害で亡くなりました。その出来事を聞いて、わたしはとても心を痛めましたし、祈りました。「なぜ？」、「どうして？」という疑問が心に浮かんできました。「仕方なかったのよ」という慰めの言葉では癒されない、哀しさを感じました。やり場のない気持ちにさせられました。そして、気がついたのは、信者の多くの人々もまた同じような哀しさを味わいながら生きているんだろうなという事実です。

愛する人を失って、病気になって、人から冷たい仕打ちをされてなどなど、人を不安と不満に陥れる出来事は生きていく中でたくさんあります。怒りとあきらめへと導くきっかけは人生の道のりにたくさん転がっています。それにつまずいて、人は哀しみの淵へと沈んでいくのかもしれませんが。

最近、わたしは聖堂に飾っているお花を見つめるように心がけています。お花だけを見つめます。そして、お花の姿を心の中に満たすように努めています。美しいとか、しおれているとかの判断はやめます。ただ、そこにあるありのままのお花を見つめるようにしています。言葉に頼らずに、自分とお花だけがそこにあるかのようにして、お花と向き合うのです。そうしないと心がざわざわして落ち着かなくなるからです。また、共同司式でミサをするときは「これはあなたがたのために渡される、わたしのからだである」と司式者がご聖体を示したときにじっとご聖体を見つめるようにしています。「これをわたしの記念として行いなさい」と示されたカリスをじっと見つめるようにしています。時間にして数秒です。でも、わたしにとっては大切な「時」です。この「時」も言葉を使わずに、ご聖体だけを見つめます。

見つめる、しかも沈黙の中で見つめていると、何かを感じます。それは不安と不満、怒りとあきらめに翻弄されている傷ついた自分から過ぎ越していけるような感覚です。この困難な時にこそ、そんな沈黙のひとときを持つことが出来ますように。